



TITLE:

珍しい小遊星1937UB: この頃の話
題

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 珍しい小遊星1937UB: この頃の話題. 天界 1938, 18(202):
105-106

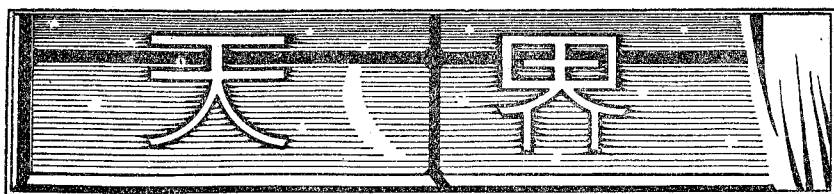
ISSUE DATE:

1938-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167603>

RIGHT:



第202號 (第 18 卷)

(昭和13年) 2 月 號

珍しい小遊星 1937 UB

(この頃の話題)

去る10月28日、ドイツ國ハイデルベルヒ天文臺の K. Reinmuth ラインム
ト氏は、下記の如く、“うを”座に就いて光度10級の一新小遊星を發見した。

10月28日 22時^h27.6 赤經 ^m1^h34.2 赤緯 +8°6'

寫眞原板上には只一線を引いてゐるばかりで、其の運動の位置角は105°又は
285°としか分らず、順行か、逆行か、不明であるが、とにかく運動速度は毎時
間21'にも上るものであつた。

光度10等の新小遊星といふだけでも近頃の珍物であるのに、速度が上記の如
き大きさとあつては、學界の一センセーションたるを失はない。そこでこの報
告をベルリンの中央局が受け取るや、否や諸所へ急報して、觀測の續行を促し、
又、發見期日以前の寫眞板の検査をも獎勵した。其の結果、獨國ゾンネベルグ
天文臺で26日と29日、ハイデルベルヒ天文臺で28日、米國ハ１ヴ１大學天文
臺で25日等の觀測が發表されたので、直ちに軌道の計算が行はれ、下の如きも
のが公表された。

計 算 者	Vick 氏	Gondolatsch 氏	Maxwell 氏
近日點通過 T	12月8.071日	—	8.09320日
近日點引數 ω	90°17.0	90°40'22."2	90°31'00."0
昇交點黃經 Ω	35 03.0	35 11 55.7	35 02 17.7
軌道傾斜角 i	9 56.1	4 41 03.5	10 06 22.6
近日點距離 q	0.50675	—	0.5049384
離 心 率 角 ϕ	—	28 19 50.3	—
毎 日 運 動 μ	—	2420.68	—
半長徑對數 $\log a$	—	0.110713	—
平 均 進 度 M	—	327°02'16."6	—
元 期 E	—	11月6.0 ^H	—
出 版 物	[R. I. 1666]	[R. I. 1676]	[IAUC 700]

此等の軌道要素が相互に不揃ひなのは、計算に用ゐた観測の期間が極めて短かくて、皆これ等は10月25日から29日までの間に過ぎないためである。従つて今後の観測續行や、發見以前の寫眞板調査が益々必要なのである。

上に記した各氏の軌道要素を通じて、特に注目を惹くことは、軌道の小ささが、非常に小さくて、今までの最小軌道たりしエロス星よりも遙かに小さいこと、それに又、此の10月の末頃、我が地球に非常に接近したことである。ゴンドラチ氏の計算によれば、此の星は10月30日18時(萬國時)前後に、我が地球からの距離が0.0039 單位、即ち僅々 580,000 秆にまで接近したこととなる。此の580,000 秆といふのは、月の距離の1倍半に過ぎないもので、全く開闢以來の空前の近距離である。因みに、近年、他の天體が我が地球に接近した例としては

1932年に 小遊星 Amor が 16,000,000秆,

1934年に // Apollo が 10,500,000〃,

1936年に // Adonis が 2,400,000〃

といふレコードがあるばかり。又、かの有名な1770年のレキセル彗星でさへ、地球へ3,000,000秆前後まで近接しただけであつた。

故に、こんどの小遊星1937UB は、未だ軌道が確立しないとは言へ、とにかく軌道の小さいことと、地球接近のレコードを作つた點に於いて、實に珍らしい話題を提供したと言つて良い。こんな例は、空前であるばかりでなく、又、或は絶後かも知れないと思はれる。

小遊星の搜索も、面倒な仕事であるが、しかし此んなのが見つかり、百年の疲勞も一ぺんに癒されるわけである。光度10級の新小遊星が今でも稀には見附かるといふことだけでも、小さいカメラを持つ観測者を勵ますこと多大である。(山本一清)

附 記. この小遊星 1937 UB は、このほど、「ヘルメス(Hermes)」と命名された。(山本)

〔第112頁より〕

彼等は其の出現する現象を凡て研究するに當り、自由に凡ゆる手段を講じ、其の機會を善用せん事が切望される。(中村覺譯)